

りし事どもを茫然と夢見る如く想ひ出した、勿論彼の眼中には領内百姓の生活不安など耳に這入る餘裕は無かつた。

此時突如！西瓜畑の中から何者か飛び出して、彈丸の様に正盛の乗れる馬の横腹目掛けて突進して来た、間一髪、正盛左右の従士は之れを遮り止め様とした。

「無禮者ッ」
「御願ひ申します、御領内佐倉の住民一同生死の願ひ仕る」
幻から覺めた正盛は、はじめて

脚下の黒い者を認めた、垢に汚れた顔、突き出した頬骨、充血した必死の眼、肺を貫く正義の聲。
「差し越願ひ叶はぬ、筋々を以て願ひ出る退れッ」

従士は面倒な、とばかり突きのけ様としたが彼は其左手に馬の前脚をシツカと抱へ、右手に持った竹竿の訴状を正盛が面前に打ち振り

「公津村名主宗吾、恐れながら、御領内の百姓に代り、命にかけてお願ひ仕る」

「エイ無禮者、打ち離すぞ」
従士の一人は既に刀の柄に手をかけたが、將軍の前列と云ひ、其上馬脚に喰ひ付いた宗吾を斬る事は出来なかつた。勿論此騒動で最前

から行列は止まつて居る、馬上の正盛は茫然として爲すところを知らない、そこへ後方から騎馬の士一騎馳け來つて正盛の前に止まつた。
「行列止まりをるは何事か、尋ねて參れとの上意で御座る」
上意、と聞いて正盛は「ハッ」と

馬上に頭を下げ、さて迷惑氣に、
「只今、之なる無禮者、領内佐倉の百姓と申し訴状差出して御座る、多分狂人で、も御座ろうか御行列の前供、駭かし正盛重々お詫び仕る」

と更に一掃した。騎馬の士は急いで引返したかと思ふと、又立戻つて來た、

「たとへ狂人にもあれ一應訴状取上げ得させよ、との上意で御座る」
(ハハッ、それ訴状取上げ、其者

固く相縛め、追て邸へ曳け」
訴状は従士の手に取り上げられた又此時まで、實に正盛が云つた如く、狂人とも見える程狂はし氣に喚き叫んで居た宗吾は漸く馬脚から離れた、そして一安心の態で従士に縛るがまゝ、繩にかゝつた。

(4) 訊問及び處刑

正盛の宗吾に對する憎悪は、甚しいものがあつた、父祖の勳功によつて佐倉十三萬石を得た彼には勿論、己が領内百姓の生活状態など知る筈もなかつた、彼は唯、將軍

の先驅を動むる晴れの場所に於て行列を亂され、剩へ、將軍によつて訴状の處分を指圖せられた不面目は彼れの堪へ能はざるものであつた。我儘な彼は其憤怒を宗吾へ向けた、彼は自身宗吾を曳き出して手痛く責め抜いたが、宗吾の炎々たる精神はあらゆる肉體の苛責に堪へて、終始、百姓の困難と、正義の道を説いて屈しない、之れには流石の正盛も手古摺つた、そして宗吾に對すれば對する程彼は宗吾から却つて威壓を感ずるので